

制度化されている自分との衝突なしに議論は始まらない

米ハーバード大学のマイケル・サンデル教授(58)が《東日本大震災後の世界のあり方をめぐって》、4月22日、《同大の学生主催のシンポジウムで、参加者と議論を交わした》という記事が、同月24日の朝日新聞にその抜粋が掲載されている。

《震災で生まれた日本への共感、国境や文化を超えた共同体意識が芽生えるきっかけになる——そう訴える教授に、参加者はそれぞれの意見をぶつけた。》

サンデル教授はまず、日本へのかつてない共感を広げた東日本大震災で、国境や文化を超えて、他者の痛みや喜びを自分のことのように共有する「世界市民」の意識が生まれるだろうかと問いかけた。答えは「共感だけでは変わらない。私たちが他者と持続的なかかわりを築くことができるかどうかにかかっている」。そのためには、他者と開かれた対話を続け、コミュニケーションを深めることが最も重要だと強調した。》

「世界市民という考えに感動した」という女性に対して、サンデル教授は、《自分の支持する政治哲学は「論理と理性」と「共感的理解」を分けるものではなく、双方を含んだものと説明》し、《世界中の人々が共同体の意識を深めるための議論も、感情や情熱と理性を切り離す必要はなく、むしろそれらを反映しながら、公の場で堂々と議論すべきだと提案した。》

シンポジウム後の朝日新聞などの取材で、「日本での原発の賛否をめぐる議論は激しいものになるかもしれない」という質問に、「私のアドバイスは、思慮深く、丁寧な議論をすること。絶対に議論を避けてはならない。社会が直面する最も困難な課題について、賛否両派が相互に敬意を持って、公然と討議できれば、民主主義は深まる。だからこそ、建設的に議論するための枠組みの設定が非常に重要となってくる」と答える。

議論の「枠組み設定」について問われると、「政治指導者に責任があるが、しばしば機能しない。有権者が望まないからだ。民主主義に不可欠な、自ら考えて議論する市民を育む教育の責任が大きい。メディアも意味ある議論を提起する義務がある」と、教授は主張する。

ここでサンデル教授はなにかを語っているのだろうか。その先のことが、最も肝心なことが語られていないのだ。《「世界市民」の意識》は「他者と持続的なかかわりを築くことができるかどうかにかかって」おり、《そのためには、他者と開かれた対話を続け、コミュニケーションを深めることが最も重要だ》と言うとき、《他者と開かれた対話》というものがどのような対話なのか、を語らないかぎり、そしてそれはどのようにして可能か、について明らかにしないかぎり、「他者と持続的なかかわりを築くことができる」はずがない。

《他者と開かれた対話》というものがあろうかのように強調する教授は、「思慮深く、丁寧な議論」の必要性について語る。「思慮深く、丁寧な議論」の根底には《他者と開かれた対話》がなければならないということであろうが、開かれる、ということがどのような状態なのか、ということが伝わらないかぎり、「思慮深く、丁寧な議論」自体も曖昧なままである。対話にしろ、議論にしろ、「思慮深く、丁寧」であらねばならない、ということだけが伝わってくるが、しかし、どのように「思慮深く、丁寧」であらねばならないのか、については、やはり不明なのである。

原発問題について「賛否両派が相互に敬意を持って、公然と討議できれば、民主主義は深まる」と述べるにいたって、サンデル教授が物事を根本的かつ徹底的に、本質的、非空想的に捉える学者ではないことがはっきりと浮かび上がってくる。「社会が直面する最も困難な課題について、賛否両派が相互に敬意を持って、公然と討議できれば、民主主義は深まる」という教科書的な言葉が、臆面もなく堂々と口から出るのは、教授が足が地に着かない空想的な思弁家以外のなにものでもないことを物語っている。どこでも、「賛否両派が相互に敬意を持って、公然と討議でき」なくなっているからこそ、いつまでたっても民主主義は腐る一方ではないのか。

11号で批判した内田樹氏が《原発はきわめて危険なテクノロジーであるので、「今ここにある原発」のリスクを抑制するために最大限の技術的工夫をしなければならないという非教条的な、純粋に技術的な議論のための居場所がなくなってしまった。クールで計量的な知性による「代替エネルギー開発までのつなぎ方」や「段階的廃炉」といった「大人の」議論が主題的に論じられることがないままに事態がここまで来てしまった》と、「大人」として語っていたのが思い起こされるが、サンデル教授も内田氏も、「民主主義」どころではなく、〈言葉が通じ合う前提が壊れている〉という状況からすべての問題は出発しなければならないことが踏まえられていないのだ。

「賛否両派が相互に敬意を持って、公然と討議でき」る場所など元からどこにもなかったし、《非教条的な、純粋に技術的な議論のための居場所がなくなってしまった》などと慨嘆めかしていること自体、バカげている。どちらも大学という知の制度に衝突せずに、むしろその知の制度に乗っかって胡座をかいてきただけの学者バカというほかない。建設的な議論というものがありうることを信じる教授は、そのための枠組み設定を問われて、「教育の責任」やメディアの義務を挙げるが、それは自分の手に余ると言っていることになり、教育は停滞し、メディアは腐敗する一方であることをみれば、《「世界市民」の意識》どころか、《他者と開かれた対話》も、「思慮深く、丁寧な議論」も絶望的であり、民主主義の昏迷が深まっていくばかりであろう。

サンデル教授の言葉を引用して、《このアドバイスの勘所は「敬意」ではない》かと、腕組みして顎を撫でている4月26日の「天声人語」は、アトリー元英首相の「民主主義の基礎は、他の人が自分より賢いかも知れないと考える心の準備です」という言葉を引っ張り出すが、“他の人が自分よりバカかも知れないと考える”社会になっていることを問題にすべきではないのか。大体、朝日を含むメディア自体が国民を“自分よりバカかも知れないと考える”ているからこそ、ジャーナリストとして死に体以外のなにものでもない記者クラブに依存して、体制側の発表をそのまま垂れ流す体たらくになっているのではないか。記者クラブのどこに国民への「敬意」がある？

《異なる意見に払い合う「敬意」なしには、議論は言葉による殴り合いとなろう》と、よく言う「天声人語」は、茨木のり子の〈舌ばかりほの赤くくるくると空転し／どう言いくるめようか／どう圧倒してやろうか〉という詩の一節を借りて、《これでは教授の助言からは遠い》と宣^{のたま}うが、ここにも発想の倒錯がさらけだされている。逆ではないか。《教授の助言》こそが議論の成立不可能性の現実から《遠い》のではないか。「想定外」の原発事故がそうであったように、その最悪の場所から問題を立てなくてはならないのではないか。

サンデル教授の《「世界市民」の意識》にしても、内田氏の《「大人の」議論》にしても、彼ら大学人が妄想を募らせるのになんの障害もないところで、のうのうと過ごしてきたことを物語っているのだ。彼らの言葉がそのような別天地から繰り出されており、「思慮深く、丁寧」であれば、「大人」になりさえすれば、議論が成り立つと考えているのは、彼らの知や思想が議論の前提に横たわっている、どうにもならない裂け目に自覚的ではない、ということである。彼らは自分に衝突せずに、制度化されている自分に衝突せずに、自分以外の人間と議論可能だと信じているのだ。

誰かと議論するためには、まずその前に制度化されている自分との議論が不可欠である。自分との議論を経ずに誰かとの議論に向かおうとしても、そこへたどり着けるはずがない。すべての利害関係に損なわれることなく、議論の前提のバイアスを是正して、双方が白紙状態で臨むためには、双方がその条件を作りだすことから始めなくてはならない。議論はその議論へと至る過程ですでに始まっているのであり、その過程抜きの議論はすべて別天地でのおしゃべりにすぎない。

彼らの言説が受け入れられているとすれば、それはその言説が徹底性を欠いているからであり、発信者も受信者も突き詰めなくてもよいので、中途半端な居心地のよさが生み出されているからであろう。要するに、お互いに安全でいられるのだ。《問いがまったく自己に切り返されない言説》であり、《自己を問わず、そこから逃げるために言葉を消費する》（以上、大澤信亮「山城むつみのミッション」-『新潮』11年4月号）だけの賑^{にぎ}わいにほかならない。彼らの空洞の「議論」談義が栄えるはずがないのは、無知が栄えるはずがないのと、全く同じことである。